

「個の追究」と「集団の追究」

個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実

〈2年次計画〉

I 主題設定の理由

1 教育の動向

社会の在り方が劇的に変わる「Society5.0 時代」の到来、新型コロナウイルス感染症拡大など先行き不透明な「予測困難な時代」により、学校現場が大きく変化を余儀なくされ、新しい教育方法の模索がされました。令和3年1月26日に、中央教育審議会により答申『「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～』が出され、必要な改革を躊躇なく進めることで、従来の日本型学校教育を発展させ、「令和の日本型学校教育」を実現させることが求められています。

2 学校経営グランドデザイン

今年度の本校の学校経営の具体的方策の中に、「専門職（プロ）としての自覚にたち、専門性を高める研究と人間性をみがく修養に努め、教師力を磨く」ことのできる、「学び続ける教師」としての姿が示されています。これまで、帯広小学校で積み上げてきた「特別の教科 道徳」の時間を要にした道徳教育の充実・改善を軸に育成される道徳性は、「豊かな心」「確かな学力の定着」「健やかな体の育成」の基盤であり、子どもたちの「生きる力」を根本で支えるものです。また、教科指導においては、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて、子どもを主語にした学びの推進が重要であることも示されています。学習意欲を高め、自ら学び、自ら考える力を身に付けることや自ら疑問をもち、主体的に解決する学習の中で、「個別最適な学び」「協働的な学び」により教科指導の充実に努めることが大切になってきます。

3 子どもたちの実態や教育課題

本校では昨年度までの3年間、「予測困難な時代を生き抜き、自分の道を自ら切り拓く子どもの育成」の研究主題のもと、道徳部会、特別支援部会の2つの部会に分かれて研究を進めました。両部会ともに副題に「伴走者としての教師の姿」を設定し、児童の主体的に学ぶ姿を実現するための工夫や日常とつなげる学習活動の工夫、児童の自己肯定感を高める工夫や個に応じた指導方法についての研究を深めました。

昨年度、道徳部会では、主体的な児童の姿を実現させるために、導入の工夫や意図的な問い返し、児童の「問い」を生かす授業展開の工夫をテーマに進めてきたことで、次のような児童の姿が成果として見られました。

○教材の登場人物に自分の生活や体験を投影しながら、自分の考えを広げたり深めたりする姿

○道徳的価値に関わる子どもの「？」を大切に「課題」を設定することによって、児童が自分のとの関わりで考える姿

しかし、一方で次のような課題も見られました。

●子ども達自身の自己有用感の低さ

●子ども達が「学び方を選ぶことができない、受け身の姿勢であること」

●子ども達の集団と関わる力の低さ

また、継続して取り組んでいる児童のアンケートからは、「課題や疑問をみんなで考えることが楽しい」や「自分の考えをみんなに話すのは楽しい」という項目の結果に学年差があり、学校全体で高めていくべき力であると考えます。

さらに、ICT 機器の活用は着実に進んでいますが、活用の実際を思い浮かべると黙々とタブレットに自分の考えなどを打ち込み、静かに友達の考えを読み終わるという交流という名の披露に留まっている場面も多く見られるようになってきました。

4 特別支援教育を取り巻く環境

平成18年3月の学校教育法等改正による特別支援教育の本格的実施に始まり、平成28年4月の障害者差別解消法施行により、合理的配慮が教育の現場に求められるなど、特別支援教育を取り巻く環境が大きく変化しました。しかし、「教育的ニーズ」や「合理的配慮」等の重要な観点が周知され、浸透してきている一方で、インクルーシブ教育システムが目指す「子ども一人一人にとって最適な学習環境や内容を選択できているか」という点においては、まだまだ課題が残る現状です。

本校の特別支援教育では、これまで、障害の状態や特性及び心身の発達の段階に応じた中で指導内容や指導方法の工夫を検討し、適切な指導を行うために昨年度は、「自己肯定感を高める人と関わる学習活動と教師の関わり方」に重点を置き、研修を進めてきました。他者の存在や関わりによって受ける刺激が、自分のことをより深く考えるために重要となるということや「何が好きで、何が嫌いで、どうしたいのか」を知ることが満足感を得るための一歩になるという成果が挙げられました。

5 研究主題について

教育の動向、学校経営グランドデザイン、本校の子ども達の実態、特別支援教育を取り巻く環境等から、個別最適な学びと協働的な学びを一体的に充実させ、自分としっかり向き合い、仲間とじっくり向き合う児童の育成を目指し、研究主題を『「個の追究」と「集団の追究」』と設定しました。

「個の追究」でイメージする子どもの姿とは、好きなことや興味のあることを伸ばそうと思う子ども、苦手なことを乗り越え、自分自身を変えていこうとする子ども、自分の目標に向かい、学び方を選び、追究する子どもなどを指します。つまり「個の追究」とは、個別最適な学びの充実に他なりません。

令和3年の答申では、「個別最適な学び」について、「指導の個別化」と「学習の個性化」に整理されており、児童生徒が自己調整しながら学習を進めてくことができるように指導することの重要性が指摘されています。

「指導の個別化」とは、子ども一人一人の特性・学習進度・学習到達度等に応じ、教師は、必要に応じた重点的な指導や指導方法・教材等の工夫を行うことであり、一定の目標を全ての子ども達が達成することを目指し、異なる方法等で学習を進めることを言います。

「学習の個性化」とは、子ども一人一人の興味・関心・キャリア形成の方向性等に応じ、教師は、一人一人に応じた学習活動や課題に取り組む機会の提供を行うことであり、異なる目標に向けて、学習を深め、広げると言います。

また「集団の追究」でイメージする子どもの姿とは、相手のよさを認め合う子ども、多様な考えに触れ、広げ深め、自分につなげることができる子どもなどを指します。つまり、「集団の追究」とは、「協働的な学び」の充実にあります。

「『令和の日本型学校教育』の構築をめざして(答申)」では、「協働的な学び」とは、子ども一人一人のよい点や可能性を生かし、子ども同士、あるいは地域の方々をはじめ多様な他者と協働することを言い、つまり異なる考え方が組み合わせたり、よりよい学びを生み出すとしています。

実際の授業づくりに当たっては、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の要素が組み合わさって実現されていきます。例えば、授業の中で、「個別最適な学び」の成果を「協働的な学び」に生かし、更にその成果を「個別最適な学び」に還元するなど「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実していくことが大切になります。

児童が「考えたい」「知りたい」「伝えたい」と感じる学習展開や学習課題の解決に、主体的に取り組むことができる授業を、そして他者の多様な感じ方や考え方に触れながら自分自身と向き合うことのできる学習展開を目指し、今年度も道徳科の研修を積み重ねていきたいと考えています。また、学力向上事業も始まることに伴い、これまでに蓄積してきた成果を基に算数科にも幅を広げ挑戦したいと考えます。